令和5年度
岐阜県立木工芸術スクール活性化検討会 議事要旨

1 開催日時及び場所

令和5年10月31日（火）13時30分～15時

木工芸術スクール（視聴覚室）

2 出席者

野尻修二会長、井端 清秀委員、岩島 義則委員、浦西 正幸委員、岡田 明子委員、澤 安紀子委員、番場 智徳委員、二村 伸一委員、見山 政克委員、村澤 ちなみ委員

3 事務局

【商工労働部】

労働雇用課長、課長補佐兼職業能力開発係長、同主査

【木工芸術スクール】

校長、管理調整係長、訓練指導員

4 会議の概要

・あいさつ　・資料説明　・意見交換

5 主な意見

【入校生の確保について】

〇この先の課題として、日本人が減ってくるので、外国人の方の活用も考えることも必要。外国人留学生等、働きたいという方、木工をやりたいという人もいるのではないかと思う。先々検討してもいいのではないか。

【修了生の就職支援について】

〇入社して、3年以降の退社は仕方がないが、1年くらいのところで辞める子がいるか把握できていると良いいのではないか。

〇受け入れ側にすると、高卒の方はまだ子供という点で、できればもう少し大人の方が欲しいという思いもあるが、実は定着率もいいし、新卒の方がメーカーに勤めて頑張っているという話も聞く。

〇一人一人のカスタマイズが必要と感じる。コーディネート、マッチングが大切。

〇適切なタイミングで話をし、企業側が自社の説明をするだけではなく、少なくとも飛騨全般の工房・メーカー、訓練生に合う企業をカスタマイズして紹介し、マッチングすることにより飛騨地域企業への就職率を上げられると考える。

〇高山の良さが伝わっていないと思う。高山だからできることは沢山ある。

〇企業の良さが伝わっていないと思う。企業選びの感覚の違いが本当に難しいと思う。

〇情報不足がプラスにはたらいて入社したところで、実際就職したら辞めるかもしれない。本人が決断する材料を、企業側・スクール側が最善の努力を尽くして提供する姿勢は大事だと思う。

〇企業と生徒のマッチングがもう少しうまくいくようにできることが課題。

〇学生に木工メーカーをバスで回って見てもらうことで、会社説明の雰囲気と違ってよいかもしれない。いきなりインターンシップでは、大変な印象があるので「ちょっと見てもらう」という仕組みがあってもいい。

〇木工芸術スクールの生徒は県外から入校する方が多いが、高山市の事業でUIJターン者への支援があっても、地元へ帰られる方が多かった実感がある。しかし、生徒さんには、高山への移住の可能性があると感じている。今後も連携をとってやっていきたい。

〇インターシップを受け入れるのだったら、体験してどうだったか、何か感じたことはないかなど企業側も聞きたい。企業側としてもインターンシップ担当をつけることが必要だと思う。終了後意見交換とか情報共有ができる場を設けてもらいたい。いいことも悪いことも共有したい。

〇良いところアンケートを生徒に実施してもらいたい。インターン先のいいと思ったところを羅列してもらう。メーカーのいいところを生徒さん同士が共有できる。

【訓練カリキュラムについて】

〇木工芸術スクール入学者と、飛騨産業の新入社員であるとか、新入社員教育的な導入の現場でご一緒させていただき、また家具作りの個人事業主さん・社長にも入っていただきながら「moritomirai（モリトミライ）」をやってみてはどうか。

【木工芸術スクールについて】

〇このような施設が域内にあることは我々にとってもすごくありがたい。これからも連携をさせていただきたい。フェスティバルでのワークショップは、非常に好評であった。飛騨のメーカーと森林文化アカデミーも含めての学校の数々、全体で飛騨・域内の木工家具の魅力を発信していくことができればと感じている。

〇木工芸術スクールを卒業したということで皆ほこりを持ってやっている。これは学校としても自信をもっていただきたい。

〇職場体験で、いろんな飛騨ブランドの面白い部分を知るだけでなく、「作る」作業に着目するのも大切。木工芸術スクールで、こういうことを引き継いでいかないと、商品はできないということを知らせて欲しい。中学校でお話しされることは、子供たちに大きな影響を与えると思う。子供が高校の次の進路の人生設計を考えるうえで、子を支える大人が行うこととして大切。来年あたりから、ぜひ中学校へも訪問をお願いする。

〇引き続き木工芸術スクールを希望する生徒がいたら、強く推薦できるということを感じた。魅力発信の点については、工業高校も定員を割っており課題としている。生徒が成長した姿を高山市民、岐阜県民に見てもらうことが、一番の魅力発信と私は考えている。木工芸術スクールでも、卒業作品展であるとか、地域に出かけてワークショップを実施するなど、積極的に行っている。1年間のカリキュラムの中で外へ出る活動を作るのは大変。しかし、そういう活動は、木工芸術スクールの生徒たちの学び、成長になり、また地域を発見する場面にもなると思う。引き続き、お互い地域の産業を支えるという立場から、頑張っていきたい。

○木工芸術スクールは教育機関。教育機関としては大変優秀で、地場産業の木工を教え、人材輩出する学校として素晴らしい実績を残してもらっていると思う。

○少子化時代で定員を満たすのは難しいが、充足している。健闘されている。就職率の 98.4%。就職もきちんとしている。スクールの先生方も自信を持って、今後とも取り組んでいただきたい。

○飛騨に就職せずに、よそに行ったとしても、自分の技術の根っこが飛騨にあると思えば、日本のどこにいても、自分は飛騨の匠にお世話になったと思ってもらえる。人としての種蒔きをしたようなこと。飛騨高山の応援団に地域外からなってくれることを期待する。

○（今年飛騨地域への就職が少ないが）学校も悲壮感を持たずに、大きな観点から、人づくり、そして岐阜県も飛騨もよかったなと複眼的に思っていただきながら、伸び伸びとやっていただければ嬉しい。業界としてもエールを送る。